

(77)

大学生の恋愛依存傾向と失恋経験の関連

——恋愛依存尺度、失恋コーピング尺度を用いて——

田 沢 晶 子

目 的

青年、成人期の恋愛及び恋愛関係の崩壊については、心理学の諸領域において研究が行われ、臨床場面ではその理論、報告をもとにした実践的アプローチが取り入れられている。発達の視点では、青年期の恋愛を互いのアイデンティティを明確化する上で重要な契機とし、自己を他者と異なる存在と認識し他者との関係を築く過程は、その後続く、成人期初期の親密性の獲得という発達課題へつながる (Erikson, 1950/1959)。青年期の恋愛関係は、このようなアイデンティティの形成過程であるがゆえに、相手に呑み込まれる不安を感じたり、相手の挙動に目が離せなくなる等不安定な関係となりやすく、結果として交際が長続きしないという特徴を有する (大野, 1993)。また、恋愛関係の崩壊が青年に与える影響については、近年さまざまな側面から実証的研究が行われている。宮下・白井・内藤 (1991) は、恋愛に対する心理的関与度、失恋のショック度、失恋後の心理的变化などからなる質問紙を作成し、失恋経験が若者に強い精神的ショックを与え、ネガティブな心理的反応を生じさせることを明らかにした。加藤 (2005) は、失恋に対する特有のコーピングが存在するとし、親密な関係崩壊後の行動や反応を参考に、失恋への対処の個人差を測定する失恋ストレスコーピング尺度を作成し調査を行った。その結果、「拒絶」「未練」という、失恋相手を避ける、関係を取り戻そうとする行動や認知が高いほど、ストレス反応が促進され回復期間が遅れると報告している。

成人愛着理論では、青年期以降の恋愛を愛着対象との関係性と捉える (Hazan & Shaver, 1987)。幼少期の養育者との愛着関係をもとに思春期ごろまでに形成された内的作業モデル (Internal Working Models: IWM) が、以後親密な関係において影響を与える。そして、親友や恋人といった親密な他者との関係において内的作業モデルが機能することが多くの実証的研究より確認されている (Hazan & Shaver, 1987; 金政・大坊, 2003; 片岡・園田, 2008; 尾形・舟橋, 2016)。さらに、恋愛関係崩壊後の立ち直りの過程を明らかにする観点から調査を行った山下・坂田 (2008) は、Bowlby (1973/2000) の対象喪失からの立ち直りモデルを参照できるとしている。すなわち、養育者と分離した幼児は、情緒的危機、抗議－保持、断念－絶望、離脱－再建を経て対象との心理的分離に至るが (Bowlby, 1973/2000)、これと同様の過程が青年期の失恋後に生じると捉えられる。失恋経験後の立ち直り過程は「離脱－再建」段階に相当する

(78)

とし、ソーシャル・サポートの得やすさが立ち直り過程を促すとしている（山下・坂田，2008）。

ところで、伊福・徳田（2006）は、恋愛における肯定的な依存も、それがあまりに過剰な場合、結果として自身の生活や心身の健康が脅かされる危険性があるとし、一般青年に恋愛依存傾向がみられるかの量的調査を行っている。その結果、恋愛依存尺度の4因子のうち「パートナーの心理的支え」は、その存在を支えにしながら自身の成長に繋げるポジティブな効果を示しており、「無条件的愛情希求」、「パートナー中心的態度」、「孤独への恐れ」の3因子は、他者に無条件的で確実な愛情を求め、自身よりも他者を最優先し過度の時間や関心を与え、見捨てられたり孤独を恐れるという恋愛依存症者の行動、特徴と一致すると考察している。片岡・園田（2008）は、恋愛依存の行動的側面を測定する新たな恋愛依存尺度を開発し、Bartholomew & Horowitz（1991）の愛着スタイルの2次元4分類モデル（自己観についてのIWMがポジティブかネガティブか、他者観についてのIWMがポジティブかネガティブかの組み合わせから愛着スタイルを、とらわれ型、恐れ型、拒絶型、安定型4分類する）との関連を調査した。その結果、愛着スタイルの「とらわれ型」が恋人にもっとも依存しやすく、「拒絶型」はほとんど依存しないとしている。田沢（2016）では、一般他者を想定した愛着スタイルを測定するECR-GO（the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version；中尾・加藤，2004）を用い、恋愛依存傾向との関連を調査したところ、恋愛に過度に依存する傾向を持つのは「とらわれ型」、「恐れ型」であった。

このように恋愛関係には、個人のIWMにより個人差が想定され、恋愛依存傾向との関連が示されている。それでは、「恋人への依存のしやすさ」は「恋愛関係の崩壊から生じる心理的反応、関係崩壊からの立ち直り」とどのように関連するのであろうか。前述の恋愛関係崩壊が個人に与える影響を踏まえると、この2つの要因の関連の検証は意義のあることと考える。本調査では、前述の恋愛関係の崩壊時後の心理的反応、失恋への対処行動に関する研究を参考に、恋愛依存傾向と恋愛関係崩壊（以下、関係崩壊）後の心理的反応、失恋コーピングとの関連を調査することを目的とした。

方 法

恋愛依存傾向と関係崩壊後の心理的反応、失恋コーピングの関連を調査するために以下の尺度を用いた。

調査票

1. 恋愛依存傾向の測定

片岡・園田（2008）により作成された恋愛依存尺度を用いた。20項目。6件法。恋愛における依存傾向の定義を、伊福・徳田（2006）より「一人でいることやパートナーがいないことに耐えられず、恋愛関係・親密な友人関係にある対象に過度に依存する、依存しその人のために尽

くす。あるいは、見捨てられることを恐れ自己犠牲的な行動をとっている状態」として恋人への依存傾向を測定するもの。

2. 関係崩壊後の心理的反応、失恋コーピングの測定

- ① 失恋経験の有無を調べるために、山下・坂田（2008）による恋愛、失恋の定義を用いた。「恋愛とは、お互いに同意のうえで、特定の相手と交際した経験とする。片思いとは、特定の相手に思いを寄せた経験とする」「失恋とは、恋に破れること」とし、「自分から別れを切り出した場合、相手から別れを切り出された場合、どちらからともなく別れることになった場合のいずれの経験も失恋に含む」「片思いで自分からあきらめた場合や告白して断わられた場合も失恋に含む」とした。「有」と答えた回答者に「中学生以降の失恋の中で最もつらかった経験」について次の質問への回答を求めた（加藤（2005）、山下・坂田（2008）では、回答者にとって非常にネガティブな経験と評価される関係崩壊を扱う必要があるため、「最もつらい失恋」を想起させており、青年期の始まりである中学生以降の恋愛に限定している。本研究でも同様に扱った）。想起した失恋相手を「Aさん」とした。
- ② 失恋からの経過期間について（ ）年（ ）ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。
- ③ 失恋するまでの交際期間、片思いの期間について「Aさんとの恋愛期間はどのくらいでしたか」と尋ね、「1. 1カ月以内」、「2. 1カ月～3カ月未満」、「3. 3カ月～6カ月未満」、「4. 6カ月～1年未満」、「5. 1年～2年未満」、「6. 2年以上」の6つの選択肢の中から選択するよう求めた。
- ④ 関係崩壊後の心理的反応を測定する尺度 失恋した相手との関係 片思い・恋愛関係の2件法。山下・坂田（2008）による失恋時のショック度。4項目。5件法。失恋関係の重要性。5件法。失恋相手との一体感（2つの円環の重なりが大きいほど心理的に近いことを示す *Inclusion of Other in Self Scale*; Aron, Aron, & Smollan, 1992 の尺度の邦訳）。7件法。失恋相手への関与度（コミットメント）（*Investment Model Scale*; Rusbult, Martz, & Agnew, 1998 の邦訳）3項目。5件法。
- ⑤ 失恋コーピングの測定 加藤（2005）の失恋コーピング尺度をもとに、山下・坂田（2008）が作成した尺度を用いた。21項目。5件法。

手続き

2010年7月、近畿圏の女子大学において、心理学関連の講義を受講している学生を対象に調査票を配布し「大学生の恋愛観に関する調査」への参加を依頼した。調査時間は20分程度であった。

結 果

本調査の有効回答数は116名であった。さらに、調査票の失恋経験を問う質問に「有」と回答した98名（平均年齢18.85歳、SD=.81、レンジ18歳～21歳）を分析の対象とした。失恋した相手との関係は、片想いが崩壊した者が36人、恋愛関係が崩壊した者が62人であった。山下・坂田（2008）と同様に、本研究では最も辛い出来事としての失恋経験を尋ねているため、回答者自身にネガティブな経験ととらえられているので、失恋後経験から受けるショック、コーピング、立ち直り過程は同等であると判断し、両者のデータを使用した。

本研究のデータの特徴として、失恋からの経過期間はおおむね2年が経過した失恋が想起されていた。失恋相手との交際期間は1か月以内5名（5.1%）、1～3か月未満26名（26.5%）、3か月～6か月未満16名（16.3%）、6か月～1年未満14名（14.3%）、1年～2年未満23名（23.5%）、2年以上14名（14.3%）であり、1～3か月未満と、1年～2年未満の交際期間であったものがやや多かった。

関係崩壊時後の心理的反応を測定する各尺度では、失恋相手の重要性、失恋相手との一体感はいずれも中程度と評価されていたが、コミットメント、ショック度の平均値は高く、失恋相手に強く関与しており、関係崩壊時に大きなショックを受けたと考えられた。

1. 恋愛依存尺度、失恋コーピング尺度の因子分析

恋愛依存尺度20項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈のしやすさから2因子が適当であると判断した。累積寄与率は51.59%であった（表1）。

表1 恋愛依存尺度の因子分析（N=98）項目番号は片岡・園田（2008）と同じ

項目	恋人中心	恋愛不安
F1 ‘恋人中心’，$\alpha=.931$		
09 恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている	.905	.081
17 恋人中心の生活である	.841	.077
24 恋人ともし別れたら生きていけないと思う	.805	.124
12 恋人とケンカや何か問題が生じたとき、他のことは全く手に付かなくなる	.802	.003
20 ちょっとしか会える時間がなくてもそのためにちょっとのためであつたら無理してでも会う	.769	.007
04 恋人と別れないためなら、恋人のどんな嫌な要求にも従ってしまう	.731	.034
08 急に恋人から会おうと言われたら予定が入っていてもドタキャンして会ってしまう	.670	.058
13 恋人に尽くすことが好きである	.650	.191
15 1日に1回は用もないけどメールや電話をして欲しい	.608	.059
23 恋人のことを想うと、強い感情が突き上げてどうしようもなくなる	.600	.216
25 恋人がいないと人生は物足りないと思う	.518	.158
21 日常生活の中で、恋人といたい時でも、恋人のことをよく考えている	.497	.326
因子間相関		.624

F 2 ‘恋愛不安’, $\alpha = .867$, 平均値 3.883

05	自分が想っているほど恋人が自分のことを想ってはくれないのではと不安になる	.174	.921
14	電話やメールの返事がないと自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる	.215	.915
22	恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じたときには悩み苦しむ	.201	.690
02	恋人が自分を気にかけてくれない時、すっかり気がめいってしまう	.169	.571
23	恋人が誰か他の人にも関心があるのではないかと疑うと落ち着いていられない	.245	.532
18	親しい同性の友人が、自分の恋人と仲良さそうに話しているのを見た時不安になる	.089	.502
因子間相関			.624
06	服装や髪形など恋人の好みに合わせる	.335	.115
16	2人の関係についての主導権は恋人が握っている	.290	.263

第1因子の代表項目として「恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている」、「恋人中心の生活である」、「恋人ともし別れたら生きていけないと思う」であった。これらの項目は、恋人に自分を合わせようとする内容であったので「恋人中心」とした。第2因子の代表項目として「自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってはくれないのではと不安になる」、「電話やメールの返事が来ないと自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる」「恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ」であった。これらの項目は、恋人との関係性に不安を抱いていることを示すので「恋愛不安」とした。

この2因子の項目は、一部で片岡・園田（2008）の結果と異なる因子に負荷したものもあったが、因子の解釈としてはほぼ一致していた。

次に、失恋コーピング尺度 21 項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。共通性、因子負荷量の低かった「6. 忘れてしまおうと思った」項目を除く 20 項目を分析の対象とし、固有値の変化と因子の解釈のしやすさから 3 因子が適当であると判断した。累積寄与率は 48.140% であった（表 2）。

表 2 失恋コーピング尺度の因子分析 (N=98) 項目番号は山下・坂田（2008）と同じ

項目	未練	肯定的解釈	否定的解釈
F 1 ‘未練’, $\alpha = .874$			
10	連絡を取ろうとした	.802	-.008
19	失恋後、相手の人を愛した	.800	-.047
13	相手の人を思い出した	.787	.002
02	相手の人と会おうとした	.731	.104
21	思い出の品を眺めた	.622	-.009
23	思い出の場所へ出かけた	.596	.128
20	関係が戻らと思った	.582	-.106
27	悔んだ	.522	-.072
15	楽しい出来事を思い出した	.486	-.056
F 2 否定的解釈, $\alpha = .818$			
09	愚痴を言った	-.058	.784
24	悪口を言った	.080	.782

(82)

14	幻滅した	-.078	.777	-.139
03	相手の人を恨んだ	.077	.777	-.037
17	相手のことを考えると嫌だった	-.151	.599	.106
11	ほかの異性を好きになった	-.040	.396	.102
F3 肯定的解釈, $\alpha = .857$				
29	成長に役立つと思えるようになった	-.114	-.010	.822
01	何かを学んだと思えるようになった	.214	-.011	.805
05	肯定的に捉えられるようになった	.133	-.020	.734
22	失恋の良い面を見つけられる	-.065	.044	.720
18	自分を磨く努力ができるようになった	.220	.103	.490
06	忘れてしまおうと思った	.150	.333	.063
因子間相関		未練	.056	.009
		肯定的解釈		.212

第1因子は「連絡を取ろうとした」「失恋後、相手の人を愛した」、「相手の人を思い出した」、などの項目に負荷量が高く、関係崩壊後も失恋した対象への思いを持ち続け関ろうと対処しているため「未練」因子とした。第2因子は「愚痴を言った」、「悪口を言った」、「幻滅した」などの項目に負荷量が高く、失恋した相手や失恋経験を否定する対処をしているため「否定的解釈」因子とした。第3因子は「成長の役に立つと思えるようになった」、「何かを学んだと思えるようになった」、「肯定的に捉えられるようになった」などの項目に負荷量が高く、失恋経験を自己の成長に役立つものとして肯定的に捉えようと対処しているため「肯定的解釈」因子とした。これらの因子は加藤（2005）及び山下・坂田（2008）の因子分析結果と一致した。

2. 恋愛依存尺度と失恋コーピングの関連

恋愛依存尺度の2因子「恋人中心」「恋愛不安」と失恋コーピング尺度の3因子「未練」「否定的解釈」「肯定的解釈」の得点の相関係数を算出した（表3-1）。

結果、恋愛依存尺度の2因子「恋人中心」「恋愛不安」と、失恋コーピング「未練」との間に正の相関が認められた。

恋愛依存尺度と心理的反応を測る尺度、重要性、一体感、ショック度、コミットメントの得点との相関係数を算出した（表3-2）。

表3-1 恋愛依存尺度と失恋コーピング尺度の相関

	恋人中心	恋愛不安
coping 未練	.420**	.387**
coping 否定的解釈	.218	.126
coping 肯定的解釈	-.009	-.116

** $p < .01$ を示す

(N = 98)

表3-2 恋愛依存尺度と関係崩壊後の心理的反応の相関

	恋人中心	恋愛不安
ショック度	.526**	.486**
コミットメント	.516**	.506**
重要性	.535**	.463**
一体感	.452**	.401**

** $p < .01$ を示す

(N = 98)

恋愛依存尺度の2因子「恋人中心」「恋愛不安」と心理的反応を測る各尺度に正の相関が認められた。

次に、恋愛依存尺度の2因子「恋人中心」「恋愛不安」の得点を、上位25%、下位25%でHi/Lo群に分け、失恋コーピング尺度の得点、関係崩壊後の心理的反応を測る尺度の得点を比較した(表4-1、4-2、表5-1、5-2)。

その結果、「恋人中心」Hi群はLo群よりも失恋コーピング「未練」の得点が高かった($t(38)=4.558$, $p<.01$)。また、「恋愛不安」Hi群はLo群よりも失恋コーピング「未練」の得点が高かった($t(38)=3.758$, $p<.01$)。他の失恋コーピング因子の得点に有意差は認められなかった。

表4-1 恋人中心 Hi/Lo 群間の失恋コーピング得点の比較

恋人中心					
	Hi (25)		Lo (15)		t 値
	M	SD	M	SD	
未練	32.040	8.349	19.267	8.964	4.558**
肯定的解釈	14.760	6.948	10.933	4.574	1.896
否定的解釈	14.320	5.807	15.267	6.881	.466

** $p<.01$ を示す

表4-2 恋愛不安 Hi/Lo 群間の失恋コーピング得点の比較

恋愛不安					
	Hi (25)		Lo (16)		t 値
	M	SD	M	SD	
未練	31.29	7.726	20.88	9.763	3.758**
肯定的解釈	15.42	7.027	12.00	7.303	1.483
否定的解釈	14.1250	6.34729	15.3125	6.89656	.560

** $p<.01$ を示す

表5-1 恋人中心 Hi/Lo 群間の心理的反応各尺度得点の比較

恋人中心					
	Hi (25)		Lo (15)		t 値
	t 値	M	SD	M	SD
ショック度	17.76	3.756	10.00	5.855	4.597**
コミットメント	13.40	1.915	8.07	4.301	4.541**
重要性	4.20	.645	2.60	1.056	5.305**
一体感	4.48	1.759	2.20	1.474	4.207**

** $p<.01$ を示す

表 5-2 恋愛不安 Hi/Lo 群間の心理的反応各尺度得点の比較

恋愛不安					
	Hi (25)		Lo (15)		t 値
	M	SD	M	SD	
ショック度	17.71	3.605	11.88	5.749	3.613**
コミットメント	13.04	2.312	10.06	4.823	2.301**
重要性	3.96	.751	2.88	1.204	3.207**
一体感	4.38	1.884	2.56	1.632	3.140**

** $p < .01$ を示す

関係崩壊後の心理的反応では、「恋人中心」Hi 群は Lo 群よりもショック度 ($t(38) = 4.597$, $p < .01$)、コミットメント ($t(38) = 4.541$, $p < .01$)、重要性 ($t(38) = 5.305$, $p < .01$)、一体感 ($t(38) = 4.207$, $p < .01$) のすべての尺度において得点が高かった。「恋愛不安」Hi 群は Lo 群よりもショック度 ($t(38) = 3.613$, $p < .01$)、コミットメント ($t(38) = 2.301$, $p < .01$)、重要性 ($t(38) = 3.207$, $p < .01$)、一体感 ($t(38) = 3.140$, $p < .01$) のすべての尺度において得点が高かった。

失恋形態と失恋コーピング、恋愛依存傾向の関連

失恋形態により、失恋コーピング、心理的反応が異なるかを検証した。親密な関係を継続した後に関係が崩壊した「離愛」と、恋愛感情を抱いている、あるいは交際を持っているが、親密な関係が形成されずに終結した「片思い」の 2 形態の各得点を比較した (表 6-1)。

その結果、失恋コーピング各因子の得点において、失恋形態の有意差は認められなかった。

関係崩壊後の心理的反応については、ショック度、重要性、一体感の得点に有意差が認められた (表 6-2)。

それぞれ「離愛」群が「片思い」群よりも、コミットメント ($t(68) = 3.015$, $p < .01$)、一体感 ($t(68) = 3.496$, $p < .01$) の得点が有意に高かった。ショック度では、「離愛」群が「片思い」群よりも得点が高い傾向が見られた ($t(68) = 1.285$, $p < .10$)。

表 6-1 失恋形態別の失恋コーピングの平均値、標準偏差

失恋形態					
	離愛 (42)		片思い (28)		t 値
	M	SD	M	SD	
未練	26.881	9.821	23.821	9.661	1.285
否定的解釈	14.071	7.079	12.857	5.967	.747
肯定的解釈	15.143	6.505	14.357	5.187	.535

表 6-2 失恋形態別の心理的反応の平均値、標準偏差

失恋形態	離愛 (42)		片思い (28)		t 値
	M	SD	M	SD	
ショック度	15.36	5.318	13.04	4.517	1.285 ⁺
コミットメント	11.86	3.346	9.21	3.938	3.015**
重要性	3.52	1.042	3.21	1.166	1.161
一体感	4.02	1.944	2.43	1.752	3.496**

⁺p<.10 ^{*}p<.05 ^{**}p<.01 を示す

考 察

恋愛依存尺度では、片岡・園田（2008）の因子分析結果と一部異なる因子に負荷した項目、負荷量の低い項目が見られたものの「恋人中心」、「恋愛不安」と解釈できる 2 因子が認められた。失恋コーピング尺度では、ほぼ加藤（2005）、及び山下・坂田（2008）の示した 3 因子「未練」「希望」（本研究では「肯定的解釈」）「失望」（本研究では「否定的解釈」）が認められた。Bowlby（1976/2000）は、対象喪失後、抗議－保持、断念－絶望、離脱－再建の 3 つの段階を経て傷つきから心理的回復に至るとしている。本研究では、抗議－保持は「未練」、断念－絶望は「否定的解釈」、離脱－再建は「肯定的解釈」にあたる。

このような過程が恋愛依存傾向尺度の 2 因子「恋人中心」、「恋愛不安」とどのように関連するのか。恋愛依存傾向尺度の 2 因子「恋人中心」、「恋愛不安」Hi/Lo 群間の失恋コーピング尺度得点、関係崩壊後の心理的反応を測る尺度得点の比較より以下が考えられる。「恋人中心」、「恋愛不安」の得点が高いと失恋コーピング「未練」の使用頻度が高くなる。常に恋人中心で過ごし、恋人の自分への気持ちにわずかでも確信が持てないと不安になりやすい傾向を持つ人は、関係崩壊後にもう一度恋人に会おうとしたり、関係を終わられずに相手にしがみつこうとする、後悔の念がわきやすい。「恋人中心」、「恋愛不安」の 2 因子は、自身よりも他者を最優先し過度の時間や関心を与え、見捨てられたり孤独を恐れるという恋愛依存症者の傾向を反映するものと推測され、このような傾向は関係崩壊時には、失恋相手との関係を断ち切れず相手に強い執着を示す行動と関連した。失恋コーピング「未練」は、Bowlby（1973/2000）の愛着対象を探し求める、抗議－保持の段階と考えられ、恋愛依存傾向を持つ人は、喪失の事実を認める「否定的解釈」、対象から心が離れ自由になる「肯定的解釈」の段階へ至ることが困難な様子が見られる。

また、「恋人中心」、「恋愛不安」の得点の高さは、恋愛対象に対する一体感、関与度、関係崩壊時に受けるショックと関連した。幼児が養育者との愛着関係を求めるように恋人を求めるが、パートナーがいらない不安や見捨てられるのではないかとこの恐れを抱いており、これを防衛するために強い一体感を求め、関与するのではないかと考えられる。また関係崩壊時に受ける強いシ

ショックは、安全基地を失ったような喪失感が生じていると推測された。「恋人中心」、「恋愛不安」の2因子は、自己観がネガティブであり、他者観がポジティブな愛着スタイル「とらわれ型」との関連が報告されている（片岡・園田，2008；田沢，2016）。自分は他者から愛情や注意を受けるに値しないと同時に、他者は関心を示してくれるという対象との関係の捉え方が、関係崩壊時に依存を生じさせやすくするのではないかと推測された。

山下・坂田（2008）は、失恋経験とその後の立ち直り過程を研究し、ソーシャル・サポートの得やすさが立ち直り過程を促すと報告しているが、本調査より、臨床場面において、面談内容から恋愛依存傾向を持つと考えられる人には、関係崩壊時のネガティブな反応を想定したサポートが必要であろう。また、同傾向を持つ人が恋愛相手へ執着する失恋コーピングを用いるという理解を踏まえて、カウンセリング場面が危機的な状況において安全基地の役割を果たし、恋愛関係の持ち方に洞察を促す介入を考えることに意義があるであろう。

失恋形態では、離愛群が片思い群よりも恋愛対象に強くコミットメントしており、一体感を感じ、重要性だと捉えていて、関係崩壊後に受けるショックが大きかった。失恋形態別では、失恋コーピングに有意な差は認められず、関係崩壊後どのような対処を行うかは離愛、片思いという恋愛関係によらないと考えられた。

本調査の問題として、調査対象が女性であり、恋愛依存傾向、関係崩壊後の心理的反応、失恋コーピングにおける性差は検証されていない。また人数の限界により、恋愛依存傾向、失恋形態差によって、失恋コーピングが異なるかなど複数の要因を考慮した分析を行っていないので、今後さらにデータを増やし上述の検証を行う必要がある。

本研究は日本心理学会第75回大会において発表したものを再度分析、検討したものである。

本研究における調査及びデータ整理に関して、大阪大谷大学平成22年度卒業生高畑絢さんにご協力いただきました。深く感謝いたします。

引用文献

- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991. Attachment Style among young adults ; a test of a four category models. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1973/2000. Attachment and loss : Vol.2. Separation : Anxiety and anger New York : Basic Books (黒田実郎ほか 訳 1976 母子関係の理論 2 : 分離不安 岩崎学術出版社)
- Erikson, E. H. 1950. *Childhood and Society*. NY : Norton. (仁科弥生 訳 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E. H. 1959. Identity and life cycle : Selected papers. In *Psychological Issues*. Vol.1. New York : International Universities Press. (小比木啓吾 訳 1973 自我同一性 誠信書房)
- Hazan, C. & Shaver, P. R. 1987 Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度作成の試み－男女観における恋愛依存傾向の比較－ 久留米大学心理学研究, **7**, 61-68.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **19**(1), 59-76.

- 片岡祥・園田直子 2008 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について 久留米大学心理学研究, **7**, 11-18.
- 加藤司 2005 失恋ストレスコーピングと精神的健康との関連性の検証 社会心理学研究, **20**(3), 171-180.
- 宮下一博・臼井永和・内藤みゆき 1991 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, **39**, 117-126.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 b “一般他者”を想定したアタッチメントスタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 尾形和男・舟橋真緒 2016 夫婦関係が幼児期の父子関係イメージ・母子関係イメージ, 高校生の愛着スタイル, 対人関係に及ぼす影響ー幼児期と高校時代についての大学生の回想からー
- 大野久 1993 アイデンティティのための恋愛に関する質的データからの接近 日本教育心理学会総会発表論文集, **35**, 208.
- 田沢晶子 2016 大学生の恋愛観と愛着スタイルの関連 甲南女子大学紀要 人間科学部編, **53**. 2016年3月発行予定
- 田沢晶子 2011 大学生の恋愛依存傾向と失恋経験の関連ー恋愛依存尺度、失恋コーピング尺度を用いてー 日本心理学会第74回大会 日本大学文理学部 発表論文集, 171.
- 山下倫実・坂田桐子 2008 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, **56**, 57-71.